

伊東市史だより

第10号

平成21年3月31日



写真2 八幡野堂の穴 (昭和13年頃、対島村撮影)



写真1 富戸ボラ納屋 (昭和13年頃、対島村撮影)

【特集】

写真でたどる戦前・戦後の伊東Ⅱ

伊東市史編さん室では市民に呼びかけながらさまざまな歴史資料の収集に努めています。前号では市民から寄贈された写真資料などで宇佐美と伊東が歩んできた近代の歴史を特集しました。しかし、そこで紹介できなかった写真資料は他にもたくさんあります。そこで、本号では伊東市の南部地域を中心にして写真でたどる市民の歴史をふたたび特集します。

町村合併の経緯

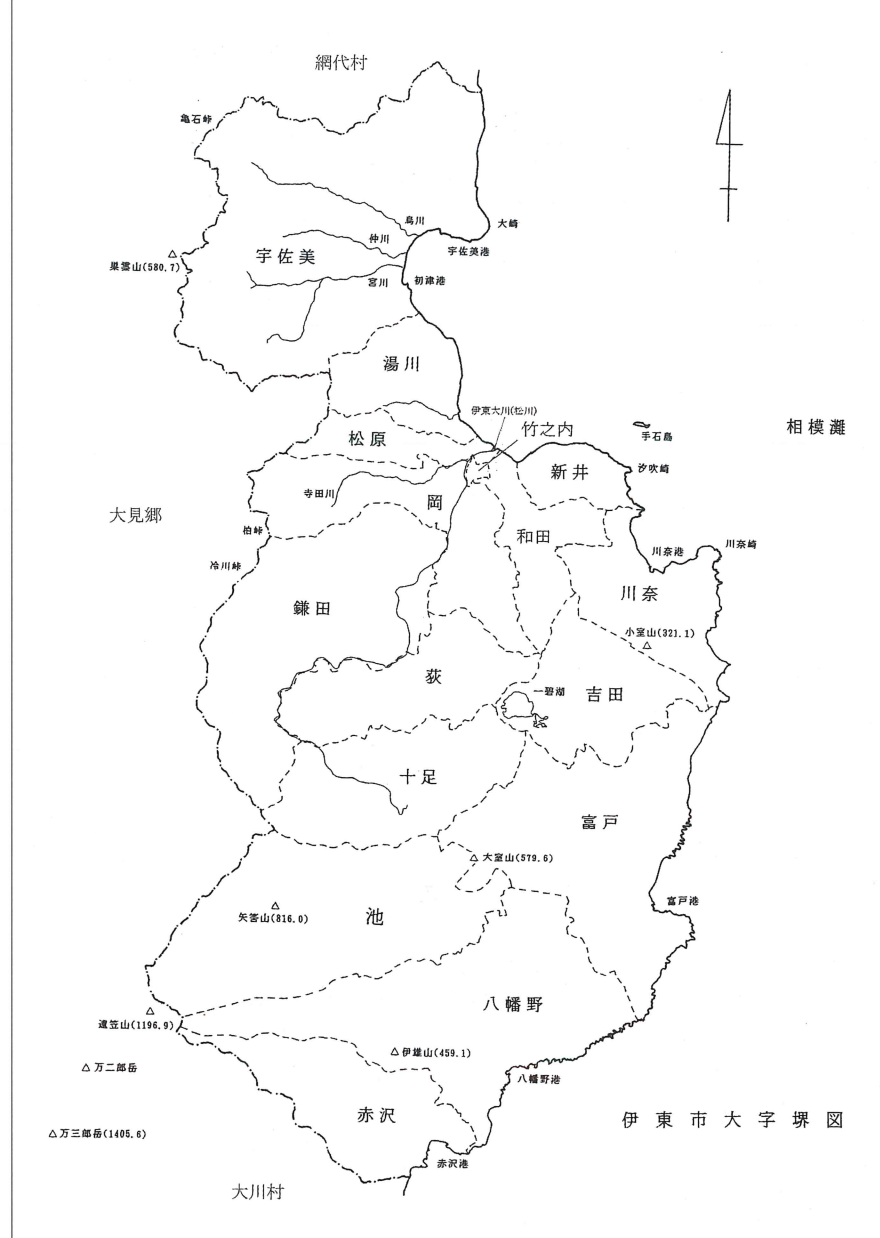
現在の伊東市域は、江戸時代までさかのぼると十六の村に分れていました。これらの村々は自然発生的な村の領域を基本にしており、現在の行政区の構成にはほぼ受け継がれています。市内には現在十五の区がありますが、江戸時代の村の数と比べてひとつ少ないのは竹之内村が玖須美区に入っているためです。明治政

る記念写真です。印半纏には「下田牛乳舎」「加藤牧場」「稲葉牛乳」などの名が見えています。伊東では多くの別荘が建てられていた時期であり、牛乳や乳製品を食生活のなかに取り込む新しい地場産業への取り組みが行われてい

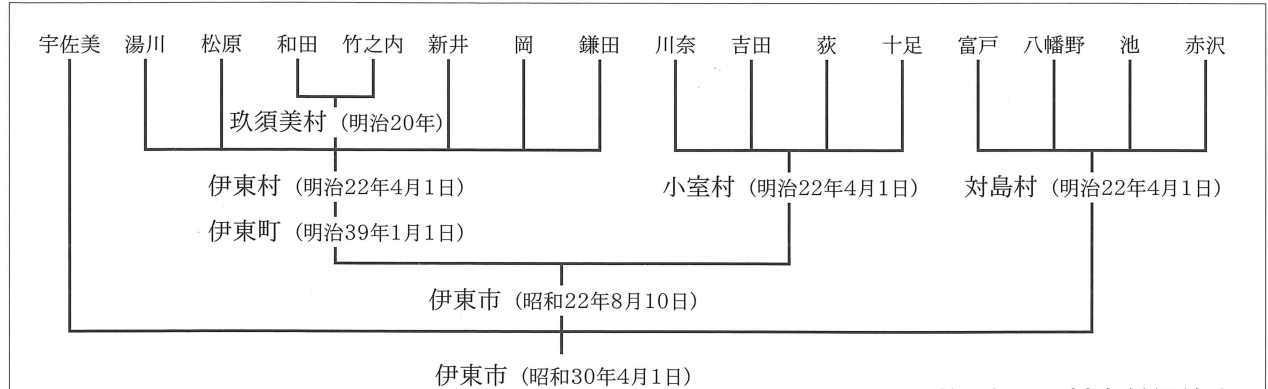
ることがわかります。鎌田地区(旧伊東町)鎌田地区は岡地区と並んで「伊東三千石」と言われた松川沿いの水田耕作の中心的位置を占めていましたが、昭和35年までに完成した土地区画整理事業によって大きく変

貌し、水田は完全に宅地化しました。川奈地区(旧小室村)伊東町は、昭和22年に南隣の小室村と合併して市制に移行します。その後、昭和30年に宇佐美村と対島村も合わせ

第1図 明治期の合併前の各村位置関係図



伊東市大字界図



第1表 町村合併経緯表

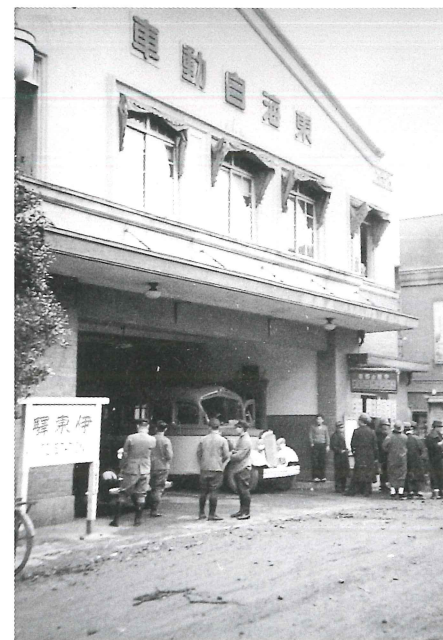


写真3 中心的役割を果たした東海自動車伊東駅 (昭和6年頃撮影、東海自動車所蔵写真)

この頃の伊東市域の経済は、海岸付きの村に周辺の山間の村々から物資が集まり、海運

府によって町村制が施行されると明治22年には湯川・松原・和田・竹之内・新井・岡・鎌田の七ヶ村が伊東村を形成し、南部地域の川奈・吉田・荻・十足の四村が小室村を。さらに富戸・八幡野・池・赤沢の四村が対島村を形成します。美は明治になってもそのまま村制を維持し、昭和30年に対島村とともに伊東市に合併して現在の伊東市域が確定します。そうしたやや複雑な動きを第1表に整理しました。

で東京に運び出して換金されるというしくみでした。大正14年に熱海から伊東までの自動車道路が開通しますが、それまでは写真5に示したように鎌田の背後の冷川峠越えで修善寺へ出る道が主要な交通路でした。さらに時代をさかのぼると東京から汽船で伊東を訪れるのが一般的でした。つまり、主要交通は海路↓冷川峠越え↓熱海からの自動車路へと変遷し、やがて昭和13年に国鉄伊東線の開通を迎えます。

岡地区(旧伊東町)

伊東の中心市街が海付きの湯川・松原・和田・新井に形成されると周囲の岡・鎌田・荻などは中心市街の需要に応える物資供給地となります。

写真4に示したの



写真5 冷川峠に向かうバス (昭和20年代撮影、東海自動車所蔵写真)



写真4 広野にあった石田牧場 (昭和10年代撮影、斎藤みや子さん所蔵)



写真6 小室山植樹作業にあたる人々 (大正初期撮影、土屋興治氏所蔵)

ります。写真6に示したのは戦前の小室山麓に集まった当時の村人たちです。横に伸びる白いものは幔幕です。中央の棒には「小室村造林事務所」と記されています。幔幕より山側には村の子どもたち、下側には大人の男たちが並んでいます。この写真から当時の小室山は草山だったことがわかります。小室山は吉田地



写真10 富戸の水汲み作業 (戦前撮影、富戸区蔵)



写真9 十足引手力男神社 (昭和10年代 小室村撮影)

半数程は火災にあつて炭化しています。これは明治25年の火災のすさまじさを示す資料であると同時に、火災で失われたものの大きさを痛感させられます。

富戸地区(旧対島村)

富戸地区は旧対島村に属していました。伊豆大島と向かい合った位置にあることが対島村という村名の由来のようですが、その名のとおり道路が開通して自動車を通るまでは大島との間の海峡を通る海上交通に頼ることが大きい土地でした。富戸・八幡野・赤沢の海付きの集落と山間の池地区で構成されています。

池地区は天城山系からの豊富な湧き水を利用した水田と薪炭を中心とする林産物で生計を立てましたが、富戸・八幡野・赤沢は溶岩台地の上に立地する集落なので、水田は殆どなく飲み水の確保に苦労しました。写真10は富戸の海岸に湧く湧水点から炊事用の水を汲む女性たちの姿が捉え

られています。

富戸などでは対岸の大島との間を結んで産物を江戸に運ぶことで財をなす家もあり、ここでも水運は重要な輸送、交通手段でした。やがて漁船にエンジンがつけられるようになると富戸や八幡野でも漁業に従事する人が増え、伊豆七島周辺やさらに沖合いに

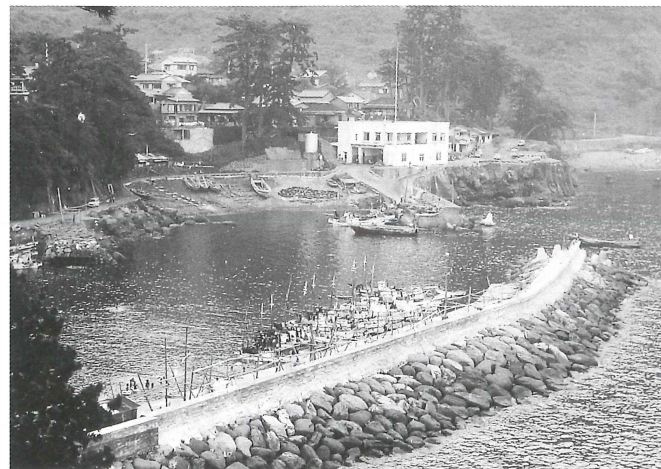


写真11 昭和30年代の富戸弘港のようす (昭和30年代、富戸区蔵)

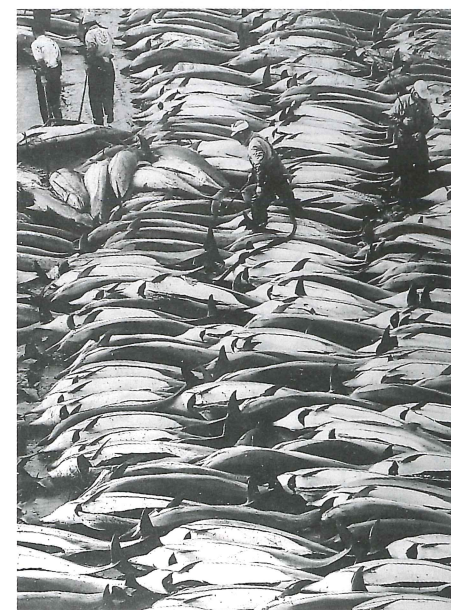


写真12 水揚げされたイルカ (昭和30年代撮影、伊東市蔵)

出かけて大漁に恵まれることもありました。

イルカ漁は川奈や富戸に独特の漁獲物と見られがちですが、明治期以前には湯川・松原や新井でも漁獲しており、伊豆一帯では縄文時代以来の伝統をもつ漁であると考えた方が妥当です。

川奈と富戸は隣り合う漁村ですが、得意とした漁には違いがあります。川奈は湾入した地形を利用してマグロ、カツオなどを湾内に追い込む漁を江戸時代から近年まで続けて来ましたが、一方の富戸では回遊してくるボラを陸上から見張りながら地形を利用して



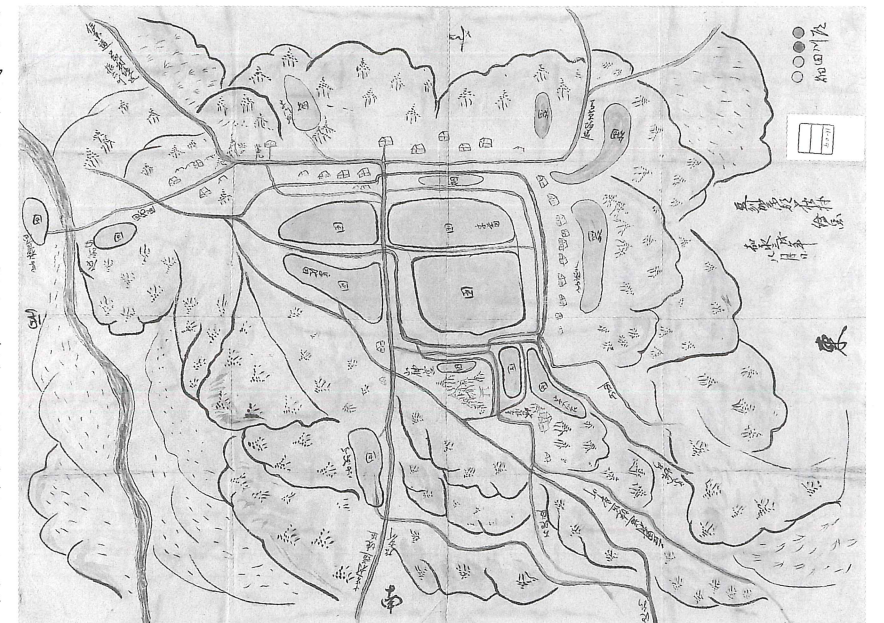
写真8 建設作業中の川奈ホテル (昭和10年撮影、東海自動車所蔵写真)



写真7 小室山リフトの起工式 (昭和37年頃撮影、東海自動車所蔵写真)

区との共有地として屋根などに使われる茅を取る採草地だったものとみられます。しかし、採草地としての利用方針を改めて造林が計画されたようです。写真のようすから、苗木を植える作業が子供たちを交えて行われたのでしよう。

写真7は東海自動車によって昭和37年に行われた小室山リフトの起工式のもようです。戦前に植林された杉や檜が根づいているのが見えています。このリフトは現在では年間15万人のお客様を迎えて伊東の素晴らしい景観を楽しむことのできる場所になっています。



第2図 嘉永3年(1850) 荻村絵図 (土屋家文書から)

昭和11年には小室山の山麓に大倉財閥によって川奈ホテルが建設されます。写真8は建設作業中の写真で、中央の望楼やパーラーにされている部分の躯体が出来上がりつつあります。漁業集落としての伝統的な川奈の姿に川奈ホテルや小室山リフトなどのリゾ

ート地としての性格が新たに加わって来たことが写真から確認できます。

荻地区(旧小室村)

明治元年の荻村は戸数40戸、人口195人ほどの独立した村を形成していました。第2図に示した絵図は嘉永三年(一八五〇)に作成された荻村の絵図ですが、大室山の溶岩流によってせき止められてできあがった中央部の湿地が水田にされて、周囲に家々が立ち並ぶ景観は隣の十足村とよく似た景観をもっています。

十足地区(旧小室村)

荻と十足地区の歴史をたどる上では明治25年に起こった大火の被害がたいへん大きく影響しています。写真9に示したのは十足地区の氏神の引手力男神社の戦前の姿です。

現在、この社は建て替えられて昔の趣はありませんが、本殿には22枚もの棟札が所蔵されています。この棟札の記述をたどると他の地区の氏神と同様の古さがありますが、

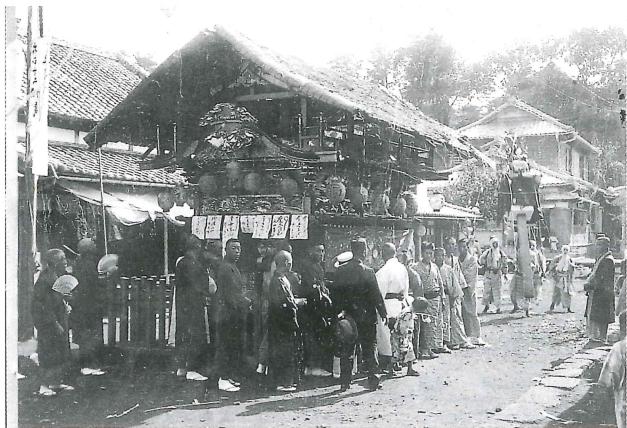


写真17 八幡宮来宮神社の祭礼 (昭和10年代撮影、山川家蔵)



写真16 八幡野港のようす (昭和10年代撮影、山川家蔵)

八幡野の民宿で撮影された一枚です。磯釣に来た客が釣りの準備をしています。壁には近くで釣上げられた石鯛・モロコなどの魚影が示されています。この魚拓から当時の城ヶ崎海岸の海中の豊かさがわかります。

対島村が戦前に作成した名所案内のための絵ハガキには表紙の写真2に示した堂の穴なども名所として挙げられています。ここは現在も同じ姿ですが、写真19に示した源頼朝の乗馬のヒズメ跡が石に刻まれているという馬蹄石は、その場所がたいへん分かります。

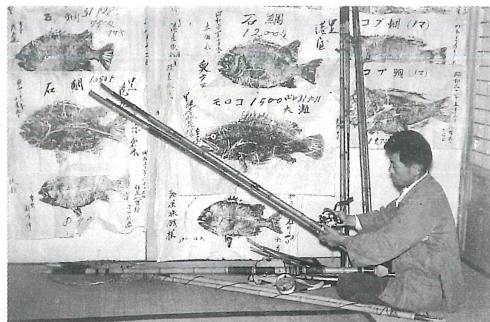


写真18 八幡野の民宿で (昭和30年代撮影、伊東市蔵)

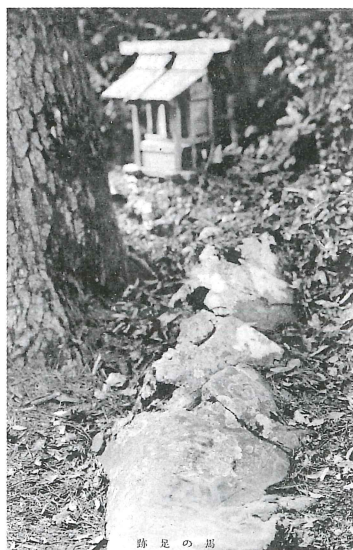


写真19 八幡野の名所「馬蹄石」 (昭和10年代撮影、山川家蔵)

こうした名所は地域の伝承や伝説として代々受継がれた言伝えを来訪客に示すことを目的にピックアップされたものですが、伝統的なことが大事な要件で、名所を新に造り出すことはできないものです。

赤沢地区(旧対島村)

現在の伊東市域で最も南に位置する赤沢地区は、明治四年の記録によると戸数31戸、人口176人ほどの集落です。写真20は昭和10年頃に撮影されたもので、海上に伊豆大島、一番手前に赤沢の集落が写っています。浮山の溶岩台地の上は、重要な産物で



写真20 赤沢集落と浮山の景観 (昭和10年頃撮影、伊東市蔵)

あつたヤマモモの木を残して他の木々は伐採されています。ここにはスダジイやタブノキなどの照葉樹類が茂っていたものとみられますが、日中戦争などによる増産態勢が影響した結果、このような姿に変わってしまったものとみられます。その状態からおおよそ70年を経過してようやく、現在の浮山の樹木が回復したとみえることができます。

この頃の自動車道路は山の中腹を縫うようにして下田方面に延びていますが、昭和42年には海岸線を走るルートが整備されて現在に至っています。

屋です。現存する市内最古の建築のひとつとみられます。

写真11は富戸の弘地区の港の様子を捉えた昭和30年代の写真です。弘港は、今でこそスキューバダイビングを楽しむ若者たちに人気ですが、富戸の人々の生活を支える漁業基地として非常に重要な位置を占めてきました。弘地区は、船や漁具などを置く納屋集落とみられますが、定住者を持



写真13 富戸 不動尊堂で奉納されている鹿島踊 (昭和30年代撮影、富戸区蔵)

写真14は富戸の蓮着寺の奥の院を戦前に撮影したものです。僧日蓮は、時の幕府から流罪にされ、鎌倉から伊豆に流されています。その折、日蓮が船から降ろされた場所が奥院近くの岩礁「狙岩」であることと伝承されており、ここには江戸時代にはるばる越後から日蓮の霊跡を巡拝した人々の落書が残されています。

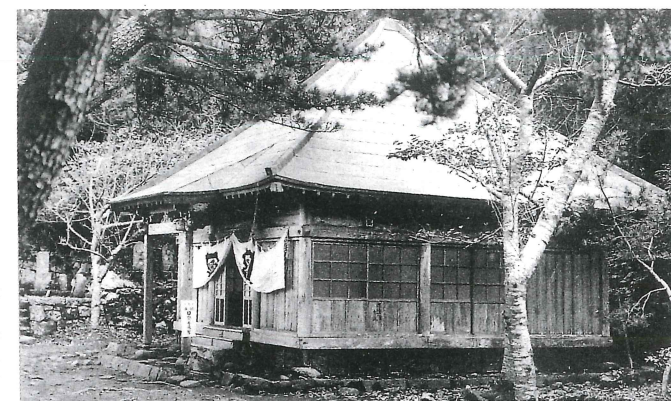


写真14 富戸 蓮着寺奥の院 (昭和10年代撮影、山川家蔵)

伊豆半島の最高峰である天城山の麓に位置する池地区は奥深い山々からの産物と湧水に恵まれている集落です。写真15は山焼きが終わった大室山の山頂から昭和30年頃に撮影されたものです。右端が矢筈山、中央に遠笠山、左端のピークが万二郎岳です。池の集落が左下にあります。その背後に水田が広がっています。その背後に水田が広がっています。



写真15 大室山頂から天城山を望む (昭和30年代撮影、伊東市蔵)

ように見えます。池地区では、この水田の排水をどう進めるかを巡って営々と努力が積み重ねられてきた歴史があります。

八幡野地区(旧対島村)

八幡野は、江戸時代の間100軒あまりの戸数で人口五百人ほどの集落として続いてきました。村内の山付き「岡」と海付きの「浜」の二つの地区の間で生業も生活ぶりもかなり違っていました。その八幡野の統合のシンボリックな存在が八幡宮来宮神社です。この神社の祭神は岡と浜の両地区の氏神を二間社流造の本殿のなかに祭っており、毎年9月に行われる祭では地区総出の大きな祭礼が行われてきました。写真17は、戦前に撮影されたもので、浜地区の中央に屋台が据えられ、その向こう側には地区内を練り歩く万灯が披露されています。現在もほぼ変わることなく盛大な祭礼が行われます。

写真18は昭和30年代前半に

伊東市史編さん事業 刊行済図書一覧

伊東市史

『伊東市史－古代・中世史料編－』伊東氏と宇佐美氏の史料を全国的視野で集成！5,000円

『図説 伊東の歴史』原始から現代まで三万年の歴史をたどる 2,000円

伊東市史叢書 各1,000円

第1集『伊東の歴史と民俗寸描』 品切れ

第2集『伊東における狩野川台風の記録』 品切れ

第3集『伊東温泉のうつりかわり』

第4集『伊東の文化財』 残部僅少

第5集『伊東の学校の歴史』

伊東市史調査報告 各2,000円

第1集『伊東市の棟札』市内社寺所蔵棟札の悉皆調査

第2集『伊東市の石造文化財』中世石塔と近世墓石・石仏の悉皆調査

第3集『伊東市の民俗』市内古老からの聞き取り調査

伊東市史研究『伊東の今・昔』 各1,000円

創刊号 講演録 「海からみた伊東」 網野善彦 「火山がつくった伊東の大地と自然」 小山真人

「伊東氏由緒の形成」 盛本昌広 「江戸時代伊豆東海岸の交通」 加藤清志

「子供の守護神としての伊豆の道祖神」 木村博 「古文書と私」 星野和子

第2号 講演録 「伊東一族の五百年」 山田邦明 「川奈姥子窟の考古学的調査」 坂詰秀一・上野恵司

「成長儀礼の歴史と民俗」 吉川祐子

「関東大震災に宇佐美の児童はどう対応したか」 笹本正治

「津波歴史データ集積の重要性」 今村文彦

第3号 講演録 「歴史と文化をどういかにするか」 笹本正治 「伊東と『曾我物語』」 坂井孝一

「元禄地震の伊東での被害と人々の行動」 西山昭仁

「伊東の近代建築とその背景」 建部恭宣

「海の村を建設する－戦時期『海の村』の分析－」 小川徹太郎

第4号 講演録 「考古学からみた伊東の歴史」 坂詰秀一 「戦国時代の伊東」 盛本昌広

「近世伊豆国伊東地域における山林利用」 田上繁

「近代漁業税の形成とその賦課動向」 佐々木哲也

「鎌田城跡発掘調査概要報告」 考古史料部会

第5号 講演録 「源頼朝一族と伊豆」 山本幸司

「明治・大正期の漁業税と増税反対運動」 佐々木哲也

「大室山をめぐる民俗」 民俗部会

第6号 講演録 「海と職人の歴史」 神野善治 「近世伊豆における海村の歴史」 泉 雅博

「沢田林・沢田についての考察」 佐藤陸郎 「『三団体事件』を考える」 渡辺秀夫

第7号 講演録 「江戸時代の伊東」 田上 繁 「伊東市朝日山経塚の基礎的研究」 時枝 務

「戦国期仁杉氏の動向」 盛本昌広

「旅人・温泉・村・身分－伊東の村落社会－」（上） 関口博巨

第8号 講演録 「明治・大正期の伊東」 羽賀祥二

「旅人・温泉・村・身分－伊東の村落社会－」（下） 関口博巨

「近代伊東のかつお節考」 佐々木哲也 「吉田砲台の実測調査」 金子浩之



最新刊『図説 伊東の歴史』

申し込み・問い合わせ

〒414-8555 伊東市大原二丁目1番1号 伊東市教育委員会 生涯学習課市史編さん担当

※刊行図書は、伊東図書納入組合加盟の市内各書店と伊東市役所5階教育委員会生涯学習課窓口にて実費頒布しています。

市外からの申し込みは、電話0557-32-3288(伊東市史編さん室)へお願いします。